

。ときめきリーフノベル

夢の中の神様

## 幸運と不運

文・高安義郎  
絵・芝 章一

学生の良太はバスを待っていた。そこへ枯れ葉が一枚降ってきた。何気なしに目で追うと、足元に千円札が落ちていたのを見つけた。辺りを見回したが誰もいない。良太は思わずかがみ込んで拾い、

「今日はツイてる」  
と呟いた。

大学の学食では奮発して九百円のAランチを食べることにした。拾った千円札を出すと、それはなんと子供銀行と書かれた玩具のお金だった。

「なんだ、ついてねえなあ」

独り言を言いながら三時過ぎ頃アパートに帰ると鍵がなかった。胸のポケットに入れて出たつもりだがなくしたらしい。仕方なく階下の管理人の所に行くと、夕方まで留守だという貼り紙があった。仕方なく近くの公園で暇をつぶすことにした。

「ついてねえなあ」  
ぼやきながら木陰のベンチに座り居眠

りを始めた。

居眠りの中に神様が現れた。良太の夢によく出てくる神様だ。

「ついてないって、何がくっついてないんだい？」

神様が聞いた。

「運がさ」

「ウンてくっついてた方がいいのかい」

「何言ってるの神様は運も知らないの」

「ウンというからさ俺、てっきり便所で…」

「やめて、そんな汚い冗談」

「だって俺、本当にウンして何なのか知らないし」

「運てのはね、幸運とか不運のことで、偶然巡り会うものなんだよ」

「そうか、良太と美佐が巡り会ったようなものか。それで美佐に会ったのは幸運なの？不運なの？」

聞かれて良太はすかさず、

「幸運に決まってるさ」

と言った。言った後で、美佐が親しく

しているアヤノに近づく為にまず馬を

射よのつもりで美佐に近づいたことを

思い出した。それが今では美佐が恋人

になっていたのだ。その意味ではこと

によると不運なのかも知れないと思っ

た。そこで良太は、

「不運を幸運に変えるのが人間の知

恵ってものさ」

と言った。

「おや、たまには良いこと言うじゃないか。それじゃ良太は自分が生まれたことを幸運に変えようとしているんだね」

良太は少しむっとし、

「生まれたことが不運だって言っているみたいなのに聞こえるけど」

「おや不運じゃないのかい」

「どうして不運なのさ」

「だって考えてごらんよ。生き物は生きるために、皆大変な思いをしてる

じゃないか。昆虫なんかは生まれた卵

の1%位しか成虫にならないんだぜ。

ライオンの子だって大人になれるのは

三割で言うし、人間だって最近やっと

生存率が高まったけど、奈良時代とか

平安時代では赤ん坊は四割も生き延び

られなかったんだ。特に男の子は二割

だったらしい」

「それ本当なの？」

「俺嘘つき神だけど、データについては

嘘は言わない主義だから」

「何かあやしいなあ。まあいいや。現

代ではほとんどの子が七歳以上になれ

るのはやはり医療が進んだせいだね」

「論点が違うだろ。ようは生きること

は大変なんだってことを話してるん

だ。つまり死との戦いに勝って生き延

びられたことが幸運なんだよ。そんな

不安と常に戦わなければならぬんだ

から生まれることは不運じゃないの

かってことさ」

良太はなるほどと思った。神様は続けた。

「もしさ、生まれ出るか出ないかって聞

かれたら良太は何て答える」

良太は考え込んでしまった。すると神

様はいたずらっぽく笑いながら、

「そんなに真剣に考えるなよ。生まれ

るってことは、選択できないことなん

だよ。それに生まれなければ幸運も不

運もないじゃないか」

「神様の話は大きだよ。僕は今日

拾ったお金が玩具だったこととか、鍵

をなくしたことにちよつとがっかりし

ているだけだよ」

「そつだな。良太の運不運は幸不幸の

範疇外だな。そもそも今日のことは、

お前がちよつと注意すればどうってこ

とないことじゃん。それについてい

とかいえないとか言うのは甘えだよ。赤

子の甘え。小犬の無駄吠えと一緒にだ。

じゃあな」

神様は消えた。

良太は涼風に煽られて目を覚ますと

歩き出した。途中で今朝玩具の千円札

を拾ったバス停に来ると立ち止まり、

ここにあったんだ

よなあ。そう思い

ながら目を落とす

と、何とそこには部

屋の鍵が落ちてい

たのだった。

